TOKYO BAPTIST CHURCH 東京バプテスト教会
Weekend Message
週末メッセージが聞けます http://tokyobaptist.org/sermons/

エフェソの信徒への手紙 - 恵みのスペクトル　何としてでも

エフェソの信徒への手紙 4 章 7～13 節

2026 年1月 3 日 & 4 日
ジェシー　セザリオ　牧師

ご挨拶
ウェスト トウキョウ、TBC 三郷、スバ・トンガ・バプティストチャーチの皆さん、ご一緒に礼拝している皆さんにご挨拶致します。父なる神、主なるイエスキリストの恵みと平安が皆さんと共にありますように。
お祈りしましょう。

始めに
東京バプテスト教会（TBC）の創設者であるダブ・ジャクソンは、『Whatever It Takes（未邦訳：何としてでも）』という本を書きました。私たちは、まだ TBC に図書室があった何年も前、この本を販売していました。実は、私とアンナは、家族でテキサスに住んでいた頃、ダブと彼の妻ドリスに何度かお会いするという恵みにもあずかりました。
『何としてでも』という言葉には、いくつかの意味が込められています。ダブはここで、「自分は行って、実行する覚悟ができていた」と、そして同時に「何をしなければならないかを分かっていた」とも語っています。
「でも、何をしなければならなかったのか、具体的には書かれていませんよね」と思うかもしれません。それこそがポイントなのです。なぜなら彼は、「神から召された使命を果たすためなら、何でもする」と言っているからです。
つまり、彼は、やるべきことが「何であれ」、それを成し遂げるために「必要なことは何でも行う」、という姿勢を示しているのです。
これが彼の態度でした。神から与えられた召し、日本への宣教師としての使命を果たすために、彼は「何としてでも」やり抜くつもりだったのです。
ダブは、次のように語っています。「全力で取り組む覚悟がなければならない。宣教に中途半端な献身はない。戦いに中途半端に参加できないのと同じだ。それを支持するか、しないかだ。全力で行くか、行かないかだ。」

振り返り
このシリーズの前回エフェソ 4:1-6 は、私たちの**原点の物語**、そして**私たちがどのような存在として作られているのか**に焦点を当てました。パウロは、最初の 3 章を振り返るように私たちに語りかけていました。そこでは、私たちの召しについて教え、信仰を思い起こすよう語ります。なぜなら、キリストに似た愛が私たちの内にあるとき、私たちは初めて「本来造られた姿」になるから、私たちは、**神の愛によって造られているから**です。
さて今日は、7 節から 16 節を見ていきますが、ここでパウロは別の方向へと話を進めていきます。彼は、私たちの物語の始まりや土台から、**私たちの行き着く先――目的、すなわち運命**へと視点を移していきます。
この 4 章の終わり、30 節でパウロは「**贖いの日**」という言葉を用います。この表現には少し謎めいた部分があり、私たちにとって理解すべきことがたくさんあります。
パウロはこう語っています。神の聖霊を悲しませてはなりません。あなたがたは、聖霊によって、贖いの日のために証印を受けたのです。エフェソ 4:30　パウロは「贖いの日」へと視線を向けながら、イエス・キリストを信じる者は聖霊によって証印を受けていると語っています。この聖霊の証印は、あなたが神の天の御国、永遠の王国に属する者だと示すしるしです。あなたの市民権と、**今この時における**守りが、「贖いの日」まで保証されているということです。
なぜなら、その日こそ、私たちが最終的な勝利を経験し、復活にあずかる時だからです。しかし一方で、聖霊を持たない者たちは、「罪の中に死んだまま」であり、「天から地に落ちた者」に支配された状態にとどまっています。彼らに待っているのは栄光ではなく、最終的なさばきです。
そして 7 節から 13 節において、パウロは非常に明確に、教会として私たちが何をすべきかを教え始めます。キリストにあって与えられた新しいいのちを、私たちはどう用いるのか。神の愛を知った者として、私たちは何をなすべきなのか。そして、与えられている聖霊の賜物を、私たちはどのように用いるべきなのか。

転換点
7 節「しかし、私たち一人一人に、キリストの賜物の秤に従って、恵みが与えられています。」
7 節は、パウロの語りの大きな転換点です。彼は直前まで、「一つのからだ」としての一致について語ってきました。「一人の主、一つの信仰、一つのバプテスマ、一つの御霊、そして一人の主イエス・キリスト、一人の神であり父である方」。これは、大文字の“C”で表される普遍的教会の姿です。
しかし、これらの節では、すべてが互いにつながり、そのつながりが最終的に一人ひとりへと流れ込んできます。つまり、神が私たちの内におられ、キリストを通して賜物として与えられているのです。
使徒 2:33「それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。」
使徒言行録でペテロは、キリストが天に上られ「聖霊を注いでくださいました」と語っています。ですから、**エフェソ 4:7** で語られる「恵み」とは、私たちの人生に与えられている聖霊のことです。
そして、神ご自身が私たちの内におられるということは、実に深遠な真理です。ヨハネによる福音書で、イエスは神の御霊が私たちの内におられる姿を、泉、あるいは湧き上がる水にたとえて語られました。それは、永遠のいのちへと湧き上がるものです。一方、パウロはガラテヤ人への手紙で、少し異なる比喩を用いています。実や収穫といった農業的なイメージです。
エフェソ人への手紙でパウロが用いるイメージは、人のからだが成長して一人の「人」になる、というものです。その「人」とは、神であるイエス・キリストです。
ただしその前に、パウロは成長のプロセスについて説明します。「今の私たち」、すなわち、神の恵みによって聖霊を内に持つ者となった私たちは、もはや以前とはまったく違う存在なのだ、と示します。うちにおられる神と共に起こる人の成長は、まったく別次元のものなのです。
そこでパウロは、8 節で**詩篇 68:19** を引用します。

戦利品を得る
パウロは 8 節でこう言っています。**「そこで、こう言われています。『高い所に昇るとき捕らえた者を引いて行き　人々に贈り物を分け与えられた。』」**

正直に言って、この箇所は理解するのが難しい節です。それだけでなく、パウロがここで何を意味しているのかについては、さまざまな議論があります。
まず、これが旧約聖書ではどのように書かれているかを見てみましょう。
「あなたは高い天に上り捕らえた者を引いて行き人々を貢ぎ物として 」詩篇 68:19 節前半（英語は 68:18）

ここでまず問いたいのは、この「あなた」とは誰でしょうか。この問いに答えから非常に興味深いことが見えてきます。
旧約聖書において、この「あなた」は、主（ヤハウェ）を指す代名詞です。
ところが、エフェソ人への手紙でパウロがこの箇所を引用するとき、「彼」という代名詞が使われています。
もしこの詩篇がヤハウェのことであり、パウロがその役割をキリストに当てはめているのだとすれば、パウロはここで、ヤハウェなる神とイエス・キリストを同一視していることになります。
ですから、「聖書のどこにもイエスが神だとは書いていない」と言われても、信じてはいけません。
なぜなら、ここをはじめ、他にも多くの箇所で、パウロはイエス・キリストが旧約のヤハウェなる神と同一であり、等しい存在であることを明確に示しているからです。これこそが、私たちの一つの信仰であり、イエス・キリストは、私たちの唯一の神なのです。
しかし、それでもなお、この 8 節は、英語で読んでも理解が難しい箇所です。
「高い所に昇るとき」 → 分かりやすい：イエスが天に上り、高く上げられたこと。
「捕らえた者を引いて行き」 → 難しい：誰のことなのか？
「人々に贈り物を分け与えられた」 → 中程度：聖霊の賜物を指している。
パウロが言う「捕らえた者を引いて行き」とは、イエスが、神の民を捕らえ支配していた敵を捕らえ返した、という意味です。つまり、敵が奪っていた戦利品を奪い返し、ご自分の民に分け与えたのです。

この「敵」とは、パウロがすでにエフェソ1:20～21で語っている存在です。「[20] 神は、この力ある業をキリストの内に働かせ、キリストを死者の中から復活させ、天上においてご自分の右の座に着かせ、[21] この世だけでなく来るべき世にある、すべての支配、権威、権力、権勢、また名を持つすべてのものの上に置かれました。」
してイエスは、敵である「闇の支配者たち」(エフェソ 6:12)を捕らえた後、聖霊をご自分の民に与えられたのです。
しかし、パウロがなぜこの詩篇を引用しているかは、この詩篇の「後半」まで読まなければ、完全には理解できません。

「あなたは高い天に上り捕らえた者を引いて行き人々を貢ぎ物として背く者さえも貢ぎ物として取られる。神である主がそこに住まわれるために。」詩編 68:19(英語は 68:18)

旧約聖書をよく知っていたパウロは、神の勝利と、闇の力に対するイエスの勝利との間にあるつながりを理解していました。それは神の賜物――神ご自身が私たちと共に住まわれることです。

私たちは、イエスが遣わした聖霊を受け、もう今は神が私たちの内と私たちの間に住んでおられます。

これは、私たちの「一つの信仰」における、もう一つの三位一体的な理解でもあり、聖霊が今ここにおられる神ご自身であることが示されています。

では、クリスマスの意味、すなわち、私たちの神が来られたことについて考えてみましょう。神は、どのように来られるのでしょうか。

ここまでの御言葉によれば、神は決して手ぶらでは来られません。

キリストは、来られたときにはご自分自身を与えられ、去られるときはご自分の御霊を与えられました。どちらの場合も、キリストは、与えうる最大のもの―ご自分自身―を与えられたのです。

では、あなたはどうでしょうか。あなたは、何を与えることができるでしょうか。これは簡単には答えられませんし、本当に、祈りが必要な問いです。

ですから、祈りましょう。神の民のために、あなたは何を与えられるのか。このことを、祈り尋ねる必要があります。

一体どういうことだ？
ここでパウロは、詩篇をイエスに当てはめた理解について、9節から10節で説明しています。
9:「昇った」というのですから、低い所、地上に降りておられたのではないでしょうか。10: この降りて来られた**方ご自身**が、すべてのものを満たすために、あらゆる天よりもさらに高く昇られたのです。
これが福音です！
これは、使徒言行録でペテロが語ったこととも一致しています。
「『彼は陰府に捨て置かれずその肉体は朽ち果てなかった』と語りました。」使徒 2:31 後半
イエスは「陰府」(ギリシャ語で墓を指す)に下られました。それは、サタンや悪しき者のために備えらる、最終的な裁きの場としての地獄ではありません。
つまり、イエスは、地の低い所にある墓、すなわち死者の領域にまで下られ、その後、父なる神の天の領域へと高く上られた、ということです。
イエスは父なる神の右の座で、天において実体を持って支配しておられますが、同時に、イエスの存在と力、権威は、今この地上においても現されています。
それはどこでわかるでしょうか。聖霊を通して私たち一人一人の内です。
最近のある月曜日、牧師たちの休日ですが、私は朝食を取ろうとしていました。ところが、息子たちを学校まで送ることになり、朝食は中断されました。息子たちは自分たちで学校に行けますし、普段はそうしています。ただ、その日は天気が悪かったんだと思います。
それに、私としても愛情を示したいという気持ちもあり、正直に言うと、送るのが好きでもあります。ほんの短い時間でも会話ができますしね。子どもたちが成長するにつれて、そういう時間は、だんだん取れなくなっていくものです。
出かけようとすると、次男が「体調があまり良くない」と言いました。そこで、少し遅れて登校することにしました。私はまず長男を学校に送り、そのまま家に戻りました。それから1時間もしないうちに、まだ朝食も取れていない状態で、今度は次男が「もう行ける」と言います。私は車に乗り、次男を学校まで送り、また家に戻りました。「やっとコーヒーと朝食が取れるな」と思った、そのときです。
妻のアンナが言いました。「大変、宿題を忘れてる……」私はまた車に乗り、学校へ向かいました。宿題を届けて、再び家へ戻ります。
気がつけば時間はどんどん過ぎていて、もうブランチの時間です。用事で外出し、あれこれしているうちに、次に気づいたのは、次男からのメッセージでした。「迎えに来てほしい」体調が良くなかったこともあり、私はまた学校へ向かいました。
さらにいくつか用事で車を出し、数時間が経ちました。外は暗くなり、相変わらず天気も良くありません。そんな中、またメッセージが届きました。
「ねえ、学校まで迎えに来てくれる？」
このような状況の中で、私にはいくつかの選択肢がありました。
1.「頑張って、自分で学校へ行きなさい」と言うこともできます。
2. とにかく送ってはいくけれど、行きも帰りもずっと文句を言い、家に戻ってからは、朝食を取っていない空腹のイライラを妻に何度も不満をぶつける。5回とも全部。
でも、そうしていたら、失ったでしょう……子どもたちとの間に生まれるはずだった、励ましや成長の時間、そして、ただ自分の不満を口にすることに夢中になっていたら、妻と穏やかに過ごすはずだった朝――いや、ブランチの時間も失っていたでしょう。それは、どちらの態度も良くありませんし、何より大切な機会を失うことになります。
3. イエス・キリストが十字架で苦しみ、命をささげられたときの歩みと同じ道を、心に留めるという選択です。ダブ・ジャクソンと同じことを思うのです。第二次世界大戦直後の1940年代、迷う人々を救うために日本へ来た彼が語った言葉――その大変さを思いながら、ただこう言うのです。
「何としてでも」

パウロは1節で「招かれたあなたがたは、その招きにふさわしく歩み、」と語っています。
そこで問われるのは、これです。あなたは、その召しにふさわしく歩んでいるでしょうか。そして、「何としてでも」やる覚悟があるでしょうか。
キリスト・イエスにある皆さん、主に従っている皆さん、今日ここに集っている皆さんこそ、召された者たちです。
思いを上にあるものに向けてください。なぜなら、地上のことばかりに心を奪われていると、天にある永遠の事柄に心が向かなくなり、それがこの地上でどのように実現しているのかも見えなくなるからです。
「何としてでも」モードに心を切り替えると、実はとても自由になります。なぜなら、その姿勢を身にまとうと、他の悪い態度は自然と脱ぎ捨てられるからです。
自分が何をすべきかが分かっているからです。「何としてでも」やるべきことを分かっているからです。
ところで、TBCでは、クラス301を通して、皆さんが仕える場所を見つけるお手伝いをしています。次回は2週間後の1月18日、そして4月にも予定されています。
クラス301では、自分の霊的な賜物が何かを祈りながら考え、奉仕をする場所を見つけるサポートまでします。
そこで、改めてお聞きします。あなたは、主に仕え、主の民を愛するために、「何としてでも」実践する覚悟がありますか。
あなたの生けるささげ物を、祭壇にささげてください。王がされたような態度をもって、王に仕え、王の民に仕えてください。
王は今も天において支配しておられます。そして、地上にいるその民は、この世のものではありません。
思いを上にあるものに向けてください。

転換点
イエスは敵に勝利し、完全に打ち破られました。そして注目すべきことに、イエスは私たちに「gift**s**/賜物(複数)」を与えてくださいました。この文法上の複数形「s」は、とても重要です。
イエスは、何を与えられたのでしょうか。
7節には、「キリストの賜物の秤に従って、恵みが与えられています。」とあります。
ここで使われている「gift/賜物」は単数形です。ところが8節では、「gift**s**/賜物(複数)を与えてくださいました。」と書かれています。
ここにパウロの語りの転換点があります。パウロはこの章の前半で、信仰と教理の一致(1～6節)について語りました。それは、私たちの出発点となる、揺るがない土台です。しかしその上で、多様性が与えられていることを示します(8節)。それは、「キリストの満ち溢れる成熟した年齢に達する」ためです(13節)。

そもそも、あなたが受け取った賜物は、自分自身のためのものではありません。与えられた賜物は、自分が属するからだ、キリストのからだを建て

上げるためのものです。それが賜物を与えられた目的だと、次に書かれています。

備え

11-12節「[11] そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師としてお与えになりました。[12:] こうして、聖なる者たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストの体を造り上げ、」

キリストが与えてくださる賜物は、私たちを整え、備えさせるためのものです。神が召しを与えられるとき、神は召しに必要なものも備えてくださいます。

7節で語られている「賜物」は、王であるキリストが、ご自身の再臨に備えて御国を整えるために与えてくださる備えだと言えるでしょう。

ここで挙げられている役割について、順に見ていきます。使徒、預言者、伝道者、そして牧師・教師です。

使徒

大文字で始まる「使徒(Apostle)」は今日の教会にはいないと考えられています。一方で、小文字で始まる「使徒(apostle)」は、今も存在します。

大文字の使徒になるには、イエス・キリストを直接目撃し、キリストから選ばれている必要がありました。

一方、聖書には複数の小文字の使徒が登場します。バルナバ(使徒14:14)、テモテとシラス(Ⅰテサロ1:1)、さらにアンドロニコとユニア(ローマ16:7)も使徒として記されています。

教会の及んでいない場所へ遣わされ、福音を伝えるよう召されている人は、今日で言えば宣教師と呼ばれるでしょう。

預言者

預言者も同様です。聖書の正典はすでに完成しています。

しかし、預言の中心は預言者本人ではありません。預言者は、神の御心を実現するために、特に重要な時に、人々を励まし、導くための神の言葉を伝える役割を担っていました。

Ⅰコリント14:3「しかし、預言する者は、人を造り上げ、勧めをなし、励ますために、人に向かって語っています。」

使徒15:32「ユダとシラスは預言者でもあったので、いろいろと話をしてきょうだいたちを励まし力づけ、」

使徒2:18によれば、預言者は男性にも女性にも与えられる働きです。

神の言葉を正しく用いて、牧師や奉仕者、そして神の民を励ますよう召されている人は、預言者と言えるでしょう。

伝道者

宣教師と伝道者の違いを整理すると、分かりやすくなると思います。違いは何でしょうか。

宣教師は、まだ福音が届いていない地域へ遣わされる人たちです。

伝道者は、すでにある教会に人々を導きつなげる働きをします。

もしあなたが、自分の教会の周りにいる、まだ福音を知らない人々に福音を伝えるよう召されているなら、それが伝道者です。TBC においては、それは国際的な日本人の方々や、外国籍の方々を意味します。

牧師・教師

この肩書きは、「牧師」と「教師」という言葉が一つのセットになっています。

ギリシャ語の本文では、定冠詞「the」は一度しか使われておらず、牧師と教師は一つの役割として結びついています。

牧師・教師は、教会にとどまり、地域教会に仕える存在です。彼らは神の御言葉を教え、礼拝を導き、活動を整え、信徒をキリストに似た者へと成長させるために仕えます。

では、「キリストに似た者へと建て上げる」とは、どういう意味でしょうか。

それは、信徒一人ひとりが愛をもって奉仕できるよう、自分の賜物を用いることを助けるということです。神の愛、力、強さ、約束、そして神の命令を思い起こさせ続けることでもあります。

11節に挙げられているこれら四つの役割は、しばしば「職務(オフィス)」と呼ばれます。なぜなら、霊的な賜物や教会内での役割の源は、キリストご自身だからです。これらはキリスト・イエスからの召しであり、ダブ牧師のスローガンである「何としてでも」という生き方へと招かれることを意味します。それは、奉仕が、お金や所有物、キャリア、またこの世の他のどんなものよりも優先されるということです。

奉仕する聖徒たち

ここで語られているのが教会の体、いわゆる「信徒の祭司職」です。彼らは、教会の必要を見て、牧師・教師の働きを支え、共に奉仕します。

聖徒に与えられている賜物は多様であり、聖書の中でもいくつかの異なるリストが示されています。そのため、厳密に限定されているわけではありません。

援助、管理、預言、奉仕、教育、勧め、施し、導き、あわれみ、知恵の言葉、知識の言葉、信仰、癒やし、奇跡、霊を見分ける力、異言、解き明かし

「奇跡って？」と思っている方もいるかもしれません。

でも、これまで一度も奇跡を求めて祈ったことがない、という方はほとんどいないのではないでしょうか。もしまだなら、2026年は祈り始める良いタイミングかもしれません。

また、「誰かが祈って、実際に奇跡的に何かが起きた」という話を、一度も聞いたことがないという人も、あまりいないと思います。それは状況が変えられたことかもしれませんし、癒やしや、知恵が与えられたことかもしれません。

奇跡は、今でも起きています。ただ、以前より少ないのも事実でしょう。イエスがナザレで奇跡を行おうとされたときのことを思い出してください。

マルコ6:5「そこでは、ごく僅かの病人に手を置いて癒やされたほかは、何も奇跡を行うことがおできにならなかった。」その理由について、マタイ13:58では「人々の不信仰のゆえに」と説明しています。

それを2026年の私たちと比べると、どうでしょうか。もしかすると、イエスは今の時代のほうが、さらに難しさを感じられるかもしれません。どう思われますか。

でも、それも無理はないと思いませんか。今の時代、人々が信仰を持ちにくくなっているのは、ある意味自然な流れとも言えるからです。

ただ、ここで一つ問いが残ります。本当に、それでよいのでしょうか。

イエスは、何と言われるでしょうか。私たちクリスチャンは信仰が足りないのでしょうか。なぜなら、これまでパウロが語ってきた相手は、ずっと「クリスチャン」であったからです。

可能性

13節「ついには、私たちすべてが、信仰と神の子の知識において一つとなり、完全な者となって、キリストの満ち溢れる成熟した年齢に達するのです。」

パウロは、エフェソの信徒たちが共に取り組む必要があることをよく理解していました。彼らが信仰において成長し、主がどういう方で何を成し遂げてくださったのかをより深く理解することで、成熟し、教会として豊かに成長していくことを願い、祈っていました。

しかし後に、エフェソの教会が燃え尽きてしまったことが分かります。黙示録2:4は、エフェソについてこう書かれています。「しかし、あなたに言うべきことがある。あなたは初めの愛を離れてしまった。」

彼らに何が起こったのでしょうか。黙示録の中で、イエスは彼らの働きと忍耐を認めておられます。悪を憎み、偽教師を退けたことも評価されています。しかし、一つ大きな問題がありました。かつて持っていた愛が、そこには見られなかったのです。彼らは義務感で行動するようになり、初めの愛を忘れてしまっていました。この「初めの愛」が何を指すのかについては、多くの学者の間で議論があります。現代の翻訳でも、解釈を補っているものがありますが、実際には聖書本文はそれを明確には説明していません。

あなたは、何だと思いますか。教会は、何を忘れてしまったのでしょうか。

実は、エフェソ人への手紙の中で、パウロが彼らの「愛」について語っている箇所があります。それが、次の聖句です。

エフェソ1:15「こういうわけで、私も、主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖なる者たちに対する愛とを聞いて、」

もし信仰を「頭の中の知識」だけにしてしまうと、私たちはエフェソの教会と同じ状態に陥ってしまうかもしれません。つまり、「初めの愛」を忘れてしまう教会です。その初めの愛とは、キリストのからだである互いへの愛です。

イエスは、「友のためにいのちを捨てること、これ以上に大きな愛はない」と教えられました。これは最もはっきりとしたキリストの似姿であり、キリストのように愛するとはどういうことかを示しています。

パウロが言う「キリストの満ち溢れる」姿は、「頭の中」にとどまるものではなく、「心からあふれ出てくる」ものによって表されます。

ヤコブの手紙2:17でも、行いのない信仰は死んだ信仰だと教えています。

2006年、アンナと私が結婚して間もなく、私はシングルミニストリーの賛美リーダーの奉仕を退きました。その直後から、私たちは一緒に「グッドニュース・クラス」で、通訳と教師として奉仕を始めました。

神学校に行くまでの約4年間、毎週日曜日にそのクラスで教え続けました。そこで私たちは確かに神の働きを見ました。いつも駐車場が空いていた、という意味ではありませんよ。何人もの人が救われるのを見ましたし、福音の伝え方を学び、今もメッセージの役に立っています。

同時に、私はTBCのウェブサイトの作業もしていました。当時、学校で週6日働いていましたが、おかしなことに、隣に座っていた上司が「授業の合間や、日本語の長い会議中にミニストリーの作業をしていいよ」と言っ

てくれました。さらにある日、聡牧師がウェブ作業用にノートパソコンをくださいました。それはミニストリーだけでなく、仕事のためにも本当に必要なものでした。どれも、私が計画したことではありません。
それでも、私はもっと奉仕したいと思っていました。
そこである日、アンナと一緒に、武牧師のオフィスを訪ねました。そのときの会話は、昨日のことのように今でもはっきり覚えています。
私はこう言いました。「どんな形でもいいので、奉仕したいです。」私は、牧師が「では、これをやってみたら？」と言ってくれると思っていました。ところが武牧師は、こう尋ねました。「あなたは、何に召されていると感じていますか？」
なぜか分かりませんが、私はそういう質問を向けられると、とても真剣になってしまうタイプです。まるで映画のワンシーンで、血で契約書にサインする直前のような感覚でした。「召し…？」正直、何も答えが浮かびませんでした。時間がやけにゆっくり流れているように感じました。
長い沈黙のあと、それでも何を言えばいいのか分からないまま、突然、自分でも驚くような形で、口から一言だけ出てきました。「……教えることです。」
頭の中では「今、何て言った？」と処理が追いつかないまま、私が考え終わる前に、武牧師はすぐにこう言いました。「それは助かります。スモールグループ・ミニストリーの 210 クラスで、教える人が必要なんです。」
こうして私たちは、当時は動画だったスモールグループ（SG）の教材を制作し、同時に 210 クラスを教え始めました。その中で私は多くの恵みを受けました。動画編集の技術を学び、メッセージの構成を考える力が身につき、将来につながる多くの機会も与えられました。
自慢したいわけではありません。正直、同時に 5 つのミニストリーに関わるのはやり過ぎでした。ただ、主がどのように奇跡的に働かれ、奉仕のために必要な賜物を与え、さらに必要なものを備えてくださるかを、私は実際に体験しました。主は、時間も、力も、機会も、道具も備えてくださいます。
問われるのはただ一つです。王である主と、その民のために、私たちは「何としてでも」やる覚悟があるかどうかです。**大切なのは、頭の中に何があるかではなく、心から何があふれ出ているかです。**

結論/勧め
聖書を見ると、「召し」はしばしば、自分には無理だと思えることへと導きます。
ヨナは、預言者として召されたとき、従うことを拒みました。
モーセは、召されたとき、自分には能力がないと感じました。
アナニヤは、パウロのために祈るよう命じられたとき、恐れました。
アブラハムは、召されたとき、心が引き裂かれる思いでした。
しかし、彼らは皆、最終的にその召しに応えました。
アブラハムは、召しに応えた後、主によって備えられ、礼拝の中で主を「エホバ・イルエ（備えてくださる主）」と呼びました。
ヨハネ 14:16-18 で、イエスはこう言われます。「[16] 私は父にお願いしよう。父はもうひとりの弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。（略）[18]私は、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。」
これが私たちの神です。神は、与えうるすべてを与えられました。ご自身さえも与えました。
イエスだけは、何の抵抗もなく召しに応え、「わたしの思いではなく、あなたの御心がなりますように」と言われました。不平を言わず、誇らず、苦々しくもならず、愛をもってその務めを果たされました。それはご自身ではなく、父なる神と、羊である人々に心を向けていたからです。それは、「何としてでも」従う覚悟があったからです。

あなたは、その召しに応える用意がありますか。自分自身を差し出す覚悟がありますか。主を信頼してください。主は必ず備えてくださいます。ただ、信じるのです。

招き
イエスは、「自分を愛するように、他の人を愛しなさい」と命じられました。どうやって自分を愛し、同時に他の人を本当に愛するにはどうしたらいいかを知りたいなら、その愛を完全に実行し、死に打ち勝たれたただ一人のもとに来てください。
イエスは、今、父なる神の右に座しておられ、やがて再び来られ、生きている者と死んだ者をさばかれます。そのさばきは、ご自身の完全さを基準とするものではなく、ただ信仰があるかどうかによるものです。この方を、世の主であり救い主として信じているかどうかです。
イエスは、道であり、真理であり、いのちです。
では、救われるために何をしなければならないのでしょうか。
ただ、信じることです

指定のない限り聖書は協会共同訳を使用しています。
聖書　協会共同訳: ©日本聖書協会
Japan Bible Society, Tokyo 201

キリストのことをもっと知りたい
洗礼を受けたいという方はこちら
メール：cc@tokyobaptist.org
もしくは：https://t-b-c.us/cc

TBC Life 申込み
（毎週届くメールニュース）
http://t-b-c.us/tbclife

スモールグループ参加申込み

http://t-b-c.us/sgsu

オンライン献金

http://t-b-c.us/give

SG レッスンの PDF

https://gotbc.org/sg0126jp

TBC カレンダー
（TBC のスケジュールが確認できます）
https://tokyobaptist.org/calendar

★クラス 301
賜物発見
1 月 18 日(日)1:00pm – 5:00pm
場所: ランゲホール(B1)
参加条件: クラス 201 まで修了した、TBCメンバーの方

★クラス 401
人生の使命を発見する
2月 8 日(日)1:00pm – 5:00pm
場所: ランゲホール(B1)
参加条件: クラス 301 まで修了した、TBCメンバーの方

全クラス申し込み： https://t-b-c.us/classes